そのまま男の両足がふわりと浮き上がり、彼の中で、世界がぐるりと回転した。
次の瞬間、背中…いや、体全体に衝撃が走る。全身に何かが走り回っているような痺れを覚えたかと思うと、それは徐々に痛みに変わって全身を蝕んでいった。
「おお…こうなるのか…ちょっと感動だな」
苦しむだけの男と比べ、寧ろ投げ飛ばしたフィーロの方が驚いた顔をしていた。組織内の日本人に教えて貰った技だったが、上手く投げる事ができたのは初めてだった。
「グア……ああああ……」
短いうめきをあげる仲間を見て、残った二人のチンピラが息を呑んでいる。4人がかりでくれば良かったものを、相手を舐めていたのか、いまだに老人の横につっ立っている。
このガキはヤバい。リーダーは目の前の少年の実力に気がつき始めた。
もう片方の男は既にナイフを取り出しており、指し示すような形で刃先をフィーロの方へと向けていた。
「……あー、抜きやがったな……」
困ったような表情を作りながらも、フィーロは内面では余裕だった。
フィーロは自然な動きで男達との間を詰めると、両手をあげながら口を開く。
「おいおい…こんなケンカに得物を出すことは無いだろう？」
「うるせえ！　今更下手に……」

言いかけたところで、男のナイフを持つ手に衝撃が走った。フィーロがつま先で的確に蹴り上げたのだ。思わずナイフを落としてしまう。地面に小さく跳ねた金属を、フィーロの足が遠くへ蹴飛ばしてしまった。

「あ……」

男の目が、ついナイフを追ってしまう。

その視界の下方から、何かが迫って来た。

それがフィーロの拳だと気付いた時には既に遅く、鼻の下あたりに強い衝撃を受けると共に、腹に蹴りを食らって地面に転がされてしまう。

「で、どうする？」

リーダーの方に向き直って尋ねる。リーダーは、相変わらず懐に手を入れたままだ。

「これからは、ままごとは学校でやれよ」

先刻の侮辱をそのまま返す。リーダーは聞いているのかいないのか、最初にフィーロの胸倉を掴んだ男の方に歩いて行く。男は立ち上がってはいたが、まだ苦しそうに喉をさすっていた。二言三言何か会話をすると、それぞれ倒れている男達の方にかけより、肩を貸しながら引き起こす。

男達は最後にフィーロを憎々しげに睨みつけると、逃げるようにその場を去って行ってしまった。